
有りがちな詩

早川計

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

有りがちな詩

【コード】

N0459X

【作者名】

早川計

【あらすじ】

時々立ち寄って、書いていきます。

自転車

自転車

少年がふつと息を吐く
冬の朝の白い空気が冴え ているのだ
どつりで吐かれた息は白 く 身が強ばる
かといって凍えているわ けでもなく むしろ頭は 無心に澄ん
でいる

別の場所で少女が寒そう にしている カバンを持 って学校へ
の道を歩いて いる

世界はみなに同じなのだ 残酷さを有していても 知らないも
のがあっても そのとき綺麗なものが存 在している

さて 進みゆく日

少年が自転車をこぎなが ら

光に白く染められながら

少女がより一層寒そうに しながら

くしゃみに鼻をすすりな がら

いま冬がとても眩い

赤い大根

火星に大根の種を植えた
荒れた大地

赤土のようなギラリと降る光
ゆっくりと育って大きな赤い大根ができた

唯一の生命 水はある（あつた？）かもしれない

人参じゃないよ

嗚呼、悠然たるちいさな野菜
誰かたべにくるよ

日曜日ってさ、赤いよね 水曜日と数字の6は青色 かな。

日曜日ってさ、Sundayだよ 訳すと太陽の日 英語、単純だな でも好きなひびき。

血の日曜日事件……1905年 これは覚えてるんだ 外国のバンドが歌ってた、かな？

遅くなってきた 西日が まぶしい もう日曜日、終わっちゃうね。うーん、明日日曜日だ。学校始まる。大変。楽しみ。

ねえ、あしたどっか遊びに行こうよ。

太鼓

太鼓

材料：かたつむり、骨・鉄、焔、革、街の残り、果実・カカシ、春の甘さ……その他諸々。

説明：

叩くと音が出ます。時、場所、人によつて音が異なり
ます。誰かと一緒に演奏してみ、ることを勧めます。
(補 足・共鳴させると尚良い ピアノ等)
何よりあらゆる組み合わせがたいせつ。最後に
あなたの哲学が得られる よう…… 数かぎりない
音楽が生まれるよう……

キス

しまつまたちがキスする とき
くさはらに風が吹いてい く

恋人たちがキスするとき あたりはまっしろになる

親子がキスするとき
野球ボールがホームラン される

鳥たちがキスし合うとき 夜空には満天の星。
(ひとりの悪い奴が好きな 人に愛を叫んだ

悪いところから出た 明 るいところへ行くんだ

きみよ。たとえほのおに 焼かれても関係ない 歩いていつて
きみに会い にゆく。 きみよ！ 天使のような きみよ……
沈没する船だって 崖だ って 孤島だって 剣だ って

どこかに行ってしまうま えに ぼくに顔を向けて ほしいんだ
……)

キスとキスが出会うとき 一つの小宇宙ができる
宇宙をコンタクトレンズ で見ると、

水色の地球を見ると、
無数のドラマがあった

人がロマンを探するとき
愉快な映画が暴れだす

缶ビールが空を飛ぶ…

そして

おだやかな日

恋人たちがキスするとき、二人が奇蹟につつまれる。

ギターガール

ギターガール

人知れず少女がすたすたと大股で出てきて 歌を歌う

弾いているのはその体に似合わない大きさの 不恰好な黄色いエレキギター

ジャンジャンジャカジャカ、ジャン……

海に向かってけんめいに掻き鳴らす

(海の向こう 光っているもの……)

彼女の作る音楽は 波に消されて聞こえなかった

ギターの作る振動が 少女の耳をわずかにゆらす

そうして孤独な歌声が 空の果てへと響いていくか
遠い火山のマグマが 変わることなく流れていくか

ひとしきり終えた少女の顔は 満足の欠片も見えた気がして
しかし幼くいたいたしかった

前に広がる景色は 晴れ晴れとしているというのに！

くる日もくる日も歌いつづけ 歌いつづけいることすら忘れよう
していた少女は
唐突に自らの絶望を悟った また嬉しかった
とても稚拙な悟りだった

鮮やかな雷が落ちた (それはギターの願い?)

ガラゴロ雷鳴が轟いた (少し遅れて)

落ちたあと もうなにも残っていなかった

チヨーカー

チヨーカー

こなごな

散り散りのチヨークを拾い集めて

変幻自在の白い文字

苦勞しつとも操ろうとして

おとなに墨を引つ張って

砕けた石に白墨を引つ張って

そこにパールをほり込んで

絵の具へ絵の具をかき混ぜて

怖い幽霊にでくわして

くらいもりから走りだた

北へ北へと進んだ

なかに鳩を入れて

フンが散らばって

徐々に人が住み始めて

平和が満たされて（白い鳩だった）

岬で犬が遠吠えして

正義だけが残った

正義は幼稚で 容赦なかった

あらゆる強さ 弱さを焼き払った

もりを溶かす大文字の火が……

そのうち鳩が死んでしまった

悼まれることを求めず

それでも悼もうとする人から離れて死んだ

……凍れるハトの剥製……

結局

お墓が作られた

勝手なことに！

盛られた花束 殺伐な彩り

あらわれたひと チョーカーは

おもむろに白墨で

悩ましげにいくつか文字を書き入れた

ノートには

阿呆な言葉 切実な翳り

うつしくしき昼夜の寝顔はどこへ……？

青い夜の光

青い夜の光

或る場所で

星が夜に上がっていったのは カガミが泣いたからだった。

求めているものはなかったと彼女が言った。

そうかと 彼は落ち着けて言葉を返した。

それらに答える声はなく 漂う孤独な透明がより強くなった。

荒野を駆けるオオカミのように

赤道にふる夕立のように

輝きある卑俗さを得るといふことはない。

あるいは後に

天裂くきれいな流星を得られようかと。

青と夢

祭壇に刺さる一輪のちいさな花を見よ

茫洋と広がる青き夜

黄の花 仄かに光あれ

空に在るかすかな星

一面の闇 白き光咲け

流星天を射よ あとは光 優しげに残るのみ

そう

無機質なこの土地に 語らいは向かない

二人の合つ息遣いに ただ頼りなく震えるだけ

歩き去る

祭壇を背に歩き去る…

或る日 おさなき彼女たちの夢

アレフ・カガミの青春の夢

詩人T

詩人T

一人の男が歩く。彼はTテイとなりの 詩を読んだ。

自嘲するかの如く 奇妙になにか歌い上げた。

こんなふうにして 詩人の気取りとみられるだろうが

嘗て 極東に於いて夢を見ただろうおれに

詩作は最早 叶わない。

叶わぬが ふと熱がおれへと返るたび

こんこんと雪 山すそに降り 詩業才たる男の幻をみるのだ。

滑稽さ。わかっているよ。

(周囲の 若い木の悲しみと 一本の まるで神の武器の巨木が在る)

けれど示したい。呪い解けずして 小果たる自分が、一心に燃えて憑かれる自分が、存在していたということ。どうしようもない願望の果ての、愚かなしるし(・・・)として。

……少し喋り過ぎた。気醒めに一つ、好きな詩を読んでみせるよ。

夢はいつもかへつて行つた 山の麓のさびしい村に

水引草に風が立ち

草ひばりのうたひやまない

しづまりかへつた午さがりの林道を

うららかに青い空には陽がてり 火山は眠っていた

そして私は

見て来たものを 島々を

波を 岬を 日光月光を

だれもきいていないと知りながら 語りつづけた……

……

数枚の木の葉がつむじ風に巻かれ、キリキリと螺旋状に舞い上がった。

詩人T（後書き）

詩は立原道造の『わすれ草に寄す』のちのおもひに、から。
青空文庫でも読めるので、気になった方は是非検索してみてください。
い。

バター

バター

くにやりと溶けるバター

塗って塗って塗りたくってひとつのオブジェができた。

人の容貌に似ていて バターのよい匂いがした。

少しずつ溶けていて てらりと光を反射した。

動きそうだが 動きはしない

うまいだろうか うまくは見えないだろあれじゃあな

なら麦パンの弾を撃ち込めば良い ということになって

漆黒のちやちな銃に弾丸を無造作に装填した。

バンバンバン。

撃ち抜かれたバターのオブジェを傍らに 通り抜けた弾丸はフォン
デュのよう で 火をすつと焚きつけた。

人は焦げ気味の匂いに意識をさ迷わせ とろりとした甘いくちどけ
に喜んだ。

傍らにはオブジェがぽつり立っていた。胸に穴を開けたまま。中身を空気に晒して。

こどもが気付かれないようオブジェを連れていった。

かわいい誘拐。だけれど真剣な、非常に真剣な表情をして 両手をべたべたにしなから駆けていった。

甘い残滓。 静寂。

朝と夜がこない町の 少年は孤独に気づいていた。

終わりを探し始める少年の 生み出されたオブジェの 続きへを告げる。

すべて在る風景たち

すべて在る風景たち

目をつむっていると真実が聞こえるならば わたしにとっての真実
が聞こえるのなら 目をつむってしよう
暗闇に佇んでいよう

寂しい旅でなく これからの思索のため
何か大事なことが迫ってくる気がしたから

車の中で頬杖をつき 夜に身を浸す

まぶたを過ぎる人工的な光に自分を感じて 底に沈むよう

コンクリート。うなぎ屋。遠ざかるランプに ジョギングしている
人。

闇夜に 一台の銀の自動車が走り、無数の家の団らん あるいは暴
力 あるいはメキシコのパレード あるいは戦争 あるいは……

過去の残響

現在のたましい

未来の観測

翻って あったかかもしれない可能性たち

すべてが今の視線で 実は脈々と時間が流れるまま

今は個人の寄り添いに惹かれるまま そんなこと

私は貴方は彼は彼女は 今夜のあとの 翌朝を歩む一人である

一人として日々を謳歌する死のたましいが霧散する

ナポレオンが地を駆ける

死に神が練り歩く

知らない季節が街を覆っている

声が聞こえる

雨が降っている

波の空間

波の空間

波が吹いた。波が吹いた。

小波があつた。小波があつた。

海亀の形と石の神殿が深く深くに沈んでいるようであつた。

清涼な波。波。波。幾重積み重なる。

陽が潰えている。光が取り除かれる。

今 真つ青である。

重くの上掛かる暗さに鎮まって

今 ここはどこなのか。

海なのか、そうであつてクジラが視界をよぎるのか。

蒼い影が落ちている。

永久の水時計が流れているようで

止まっているのと。

波なのか。

波なのか。

青がただ 広がっているのか。

鉄塔の描写

鉄塔の描写

おしなべて 次々居並ぶ塔が空想深層地帯を占めている。

工場の風情は遠くへ行ってしまうて 鉄の林立。

ズーム。

描き出された線が何千と走り合い 克明に描写される鉄塔が 独特の感性で浮き彫りになっている。

塔の輪郭線に従って 乾いた風が と駆け巡っている。

ああ 来たか。

声が聞こえた気がした。

いや、聞き取ろうとしたんだなと思った。そしてどちらでもなく、静かな語りに捉えられたのだと 確かに思った。

ぼくが声を上げる。

惜しげなくツバサを広げて文明に歯を立てるように。

わら半紙にペンが伝って時空が歪むように。

打ち出された一本の矢がぼくの頬をかすった。

先端にエナメルをこぼして赤い矢が飛ぶ。

エナメルはさらりさらりと屑鉄をこぼした。

屑鉄に光分子がまとわりついた。

固まった痛みをよそに

架空の夕暮れ。

響きあう はるかな鉄塔と十二月のそら。

夏の……

抱きしめた。とても弱い抱きしめた。

あの夏。汗に濡れてさ迷っていた。

蝉がまだ鳴いていた。

ツクツクボオーシ、ツクツクボオーシと耳鳴りがして、きみが表情をして、表情が蘇っていつて、後ろを向いた。

むろんきみはどこかにいて、だが前にはいなくて、きみがどうしたって云うんだと、考えた。

鈍い痛みが走った。かつての暑さが僕にまとわりついた。

道端の缶を蹴った。転がった。高く飛び、空中に弾けるといふ夢想は起きなかった。

「大丈夫？」

情けない顔がガラスに映った。唇を「情けなく思い返していた」と動かそうとして、やめた。

あの時

弱そうなきみを弱い僕は守りたかった。時々泣いているようなきみを。強情なきみを。

いらぬ記憶なのだ。

バスが煙を出しつつ走り、坂道があった。そばの奔流へ持っていかれた感覚がした。

そしていつか、何度かの追憶の終わりにすべて消えてしまうのだから、紫の花が揺れて

砂のようにさらさらと、夢が散っていった。

夏が終わる…

夏の夢が終わっていく景色が見えた。

午後

午後

目を開いてぼんやりしたあとに、やらなければいけないことがあると、穏やかな雨の蒸発に似た、明晰とも思う目のじんわりした痛みに立ち上がり、それからうがいした。

その青年が鉛筆を持って、少しの迷いと疑いを認めながらも思いを廻らせた。

寂れる暗闇に、ろうそくが熱く溶けている。円形に燃え、中心に置いている。

音楽を愛していないが、記憶の蓄積である 青年は思う。これはただ思うだけであって、青年の心の内で対流はない。

青年が小説を読む。読み終えて、顔を上げた。

彼と彼から伸びる直接の先にある世界の間、道が敷かれた。それは唯一の道だと青年が思う。移り変わる道。隔たりのある道。

そうして考える。

気付いていない世界が僕を取り巻いて広がっているのかもしれない。異次元の無数の泡のように浮いているかもしれない。

犬はどうだろう。

他人が感じること。

好きだった人はいま、何をしているだろうか。
抗えない運命があるだろうか。

馬鹿馬鹿しい、何か食べよう。と彼はパンを食べる。

そして彼は宿題があったことを思い出した。数学のノートを開いて
問題を解き始める。

午後。だるい光である。

島

島

駆けめぐる風が吹く。

ぼくのところにも届いた。

アニマルが体毛を靡かせてあくびをした。

それをぼくが見た。

もっと厳密に言うならあくびをしかけて、もろに風を食った。

ふは、と少し笑った。

風が本当にくるぐる吹き回っている。島を包んで円柱状に。

鳥とぼくも包まれちゃうなあ、とか、思う。ハッキリ見える。

あと水だ、地平線上の水が続いている。きらきら光って、太陽が天上にあった。

空いっぱいに叫びあげたい。

そして、ぼくという生命がこの島に存在するのだ。

飛びすすむ、飛びすすむ幾羽の鳥。

鳥たちが鳴く。鵜だ。

おうい、聞こえるか。

ぼくは生きているよ。

時計

時計

時計の針を気にすることが悪いこととは感じない

かといって 針を動かすことは冒険的のようで どんにも狂っているようだ

間の空いた部屋で

雪が降り注ぐ

なごやかに とても鮮やかな不協和音が白昼に入る わたしのなかの、人のいる白昼で

光は閉じ込められているようだ

かつての小説

わたしの一部もどつやら

剥離の風景に閉じ込められているらしかった

ノスタルジアと言うのは古びていて 郷愁と言うくらい地に付いていない

奥から析出した刹那的懐かしさに 体を縮ませた

鋭さをもつ季節が隣を過ぎ

ある時の過ぎてゆくさま

わたしはこれをどこかまた身につけて

懐かしさを見るだろつと 懐かしい一片に思つ

峠を越える春先の風

峠を越える春先の風

笹揺れる山で吹き抜けるひとつの風が、草をかんからと大きく揺らし抜け、方々の草木を芽吹かせ、

一本とおりとおった太い道、旧くの大河の跡のようであった、少し寒い頃に暖かさを含んだ風であった、

人は後ろ姿を見頼のぬるさがじんわりした、枯れ山を駆け廻る風であった、豊饒をもたらす風であった、木枯らしを終えた春先のあまの春風であった、

植物はそれを吸いこんだ、動物はそれを吸いこんだ、

人は、炎は、土は、それを吸い込んだ、肺を湿らし、大きく膨らむ炎、新しい生命の気配であった、

新しいぬくもりの気配であった、

鮮烈巻き込みあげる光と風と熱であった、煌々の景色であった、古かび臭い山、

街へ行く風であった、桜が綺麗に咲くまでの、大樹の下に行く、風であった……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0459x/>

有りがちな詩

2012年1月4日23時52分発行